



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語借用語の近代中国への移入：梁啓超の役割について
Author(s)	李, 運博
Citation	国語国文研究, 125, 90(1)-75(16)
Issue Date	2003-10-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93668
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_125-90-75.pdf



日本借用語の近代中国への移入

—— 梁啓超の役割について ——

李 運 博

1 はじめに

辛亥革命発生の100周年を記念するため、『人民日報(海外版)』(2001年10月15日)に北京師範大学劉志強教授と王瑞華助教授が合同で発表した「中国留学生と辛亥革命後の社会進歩(中国留学生と辛亥革命後の社会進歩)」という論文が掲載された。劉と王は上記の論文に於いて、「まず、在日の中国人留学生は日本の書籍を大量に(中国語に)翻訳するうち、多くの日本語を中国に輸入し、中国語を豊にした。(中略)(日本語は)中国の文章ジャンルの変化に大きな影響を齎し、現代中国外来語の主要な源泉の一つである」¹と、指摘している。即ち、今日の時点においては、近代中国に日本借用語が大量に存在することは周知の事実であり、いつ、どのように、このような状態になってきたかを見ることは重要な意義を持っている。

今までの研究により、日本借用語が大量に中国へ「流入」し始めた時期は戊戌変法の失敗で日本へ亡命した梁啓超²が『清議報』³を創刊(1898)して以後であることが指摘されている。

本稿では、最も全面的に梁の著作状況を反映したものであり、近代中国の政治、思想、文化などの重要資料として多く使用されている『飲氷室合集』⁴(文集45巻・専集104巻)に使用した、英語原文付の語を考察対象語として、日中両国の語の利用時期を探りながら、日本借用語の中国への移入において、梁が果たした役割を具体的な語に則して実証してみたい。

2 先行研究

沈国威(1994)は「日本借用語の初期の状況について述べるとき、啓蒙者、翻訳者、学者である嚴復、梁啓超、王国維を抜きにしては語れない。」⁵と指摘した。陳力衛(2001)はより具体的に「章炳麟、梁啓超の文章や在日の留学生が発行した『清議報』などもこうした語彙の交流を伝える資料として調査すべきだ。」⁶と指摘し、日本借用語の初期の状況を考察する際、梁に対する考察の必要性を強調した。

彭文祖(1915)、王立達(1958)、何華珍(1997)は日本借用語と梁との関わりを指摘した。日本では実藤惠秀(1943)、大原信一(1994)、荒川清秀(1999)がこの研究

を手がけ、梁に言及している。

上記の研究により、近代における日中語彙交渉を研究する際、梁に使用された語を考察対象語にして、その出典を中国へ新語を伝える重要なルートの一つとすることが窺える。しかし、梁が日本借用語とどのような関係を持っているか、梁がどの語を、どのように近代中国に移入したか、またそれがどのように中国語に定着したかについては、上記の研究は何れもこの問題を指摘するだけの段階に止まり、梁の著作を網羅的に調査し、具体的な語に則して考察することはなされていない。

3 調査資料と考察方法

考察にあたって、最初の本格的な華英・英華字典であるモリソン『華英字典』（英華の部、1815-1823）、日中近代語交流の起点となる辞書として位置づけられるロプシャイト字典⁷『英華字典』（1866-1869）、『英華和訳字典』（1879）、『新增英華字典』（1897、以下は『新增 97』と略す）、『新增英華字典』（1899、以下は『新增 99』と略す）、『華英音韻字典集成』（1903）、及びロプシャイト辞典から直接の影響を受けた『英華大辞典』（1921、以下は『英華大』と略す）を中国対照資料とする。『哲学字彙』（初版 1881）、『和英語林集成』（英和の部、初版 1867・再版 1872・三版 1886）、『明治のことば辞典』（1986）⁸を日本対照資料とする。

上記の辞書だけでは調査不十分のため、『言海』（1890）、『大言海』（1937）⁹、『大漢和辞典』（1956、以下は『大漢和』と略す）、『新和仏辞典』（1907）などの英和・和英、和仏・仏和、和独・独和辞典を日本対照資料の補助とする。『辞源』（初版 1915、16 版 1920、17 版 1922）、『辞源統編』（1931）、『辞海』（1936）、『国語辞典』（1937、中華書局）、『漢語大詞典』（1986-1994、以下は『漢語大』と略す）を中国対照資料の補助とする。

考察手順としては、まず、考察対象語がいつ、どのように日本の対照資料に採録されているかを検索する。次に、それらが中国の辞書類に採録されているかどうかを調査する。採録されている場合、いつ、どのように採録されたのか、古典の出典が書かれているかどうかを調査する。古典の出典のある語については、意味の変遷があるかどうかを分析する。新たな意味が付与された場合、それは中国語内部で独自に生じたものか、それとも日本語の影響によったのかを検討する。最後に、その概観を把握して日中両国の語の利用時期を探りながら、梁と日本借用語との関係、特に日本借用語の近代中国への移入における梁の役割を明らかにしたい。

なお、考察対象語の選定には以下のように厳しい条件を設定する。

- 1 テキストとする『飲水室合集』に使用された、英語原文付きの語（78 語）。
- 2 梁が日本滞在中（1899-1912）に作成した文章に使用された語（58 語）。
- 3 日本対照資料に採録されている語（24 語）。

上記の条件に従って、本稿では梁が日本亡命中に作成した文章に使用した、英語原文付き、かつ日本対照資料に採録されている 24 語を考察対象語とする。

4 「日本人訳」「東訳」などの特徴的な表現をつけている語

この類の語については、梁が自ら「日本人訳」「東訳」「日本或訳」などの特徴的な表現をつけて解釈した。少なくとも梁自身はこれらの語が日本借用語であると明確に認識し、確固とした語彙認識を持っていて、これらの語を近代中国に移入したと考えられる。

4.1 語の出現箇所¹⁰ による分類

「日本人訳」「東訳」「日本或訳」などの特徴的な表現をつけている語は8語であるが、それらは大体次の3タイプに分けられる。¹¹

A 割注及びその関連部分にある語……2語（功利派、催眠術）

例：於是乎樂主義 Utilitarianism 遂為近世歐米開一新天地。此派之學說日本或訳為快樂派或訳為功利派或訳為利用派西文原意則利益之義也吾今闡括本派之梗概定為今名。¹²

B 附言や案にある語……1語（論理学）

例：（附言二）Logic 之原語。前明李之藻訳為名理。近侯官嚴氏訳為名學。此實用九流「名家」之旧名。惟於原語意。似有所未盡。今從東訳通行語。作論理學。¹³

C 本行にある語……4語

例：「革」也者。含有英語之 Revolution 與 Reform 之二義。Reform 者。因其所固有而損益之以遷於善。如英國國會一千八百三十二年之 Revolution 是也。日本人訳之曰改革曰革新。Revolution 者。若軋輪然。從根柢處掀翻之。而別造一新世界。如法國一千七百八十九年之 Revolution 是也。日本人訳之曰革命。¹⁴

4.2 辞書類による調査

対照資料及び補助資料による調査結果をそれぞれ表1と表2に纏める。

なお、「Utilitarianism」の訳語については、『飲氷室合集』では「功利派」を採用した。「功利派」を取上げたのは他に『辞源』、『国語辞典』がある。これに対して、『哲学字彙』『大言海』ではそれぞれ「功利、功利学」「功利説、功利主義、功利教」を取上げ、『明治のこば辞典』では、「功利」「功利説」という見出し語を取上げている。『英華大』に至って「功利学」に訳したが、上記の訳語は何れも『英華大』以前の華英・英華辞書類に採録されていない。『辞海』では英語原文を付けたまま、「功利主義」を取上げる。『国語辞典』では「功利派」の他に、「功利主義」を見出し語としている。「功利」「功利学」「功利派」「功利主義」「功利説」「功利教」は別々の語であるが、「功利」は同じである。この現象については、この語が定着するに至るまでのゆれとも考えられる。本稿では考察対象語として「功利学」を採用することとする。

表 1¹⁵

英語原文	漢語	哲学 字彙	和英語林 集成			明治 のこ とば 辞典	年代 (梁)	華 英 字 典	英 華 字 典	英華 和訳 字典	新 増 97	新 増 99	華 英 音 字 集 成	英 韻 典 成	英 華 大
			初	再	三										
Utilitarianism	功利学	○	×	×	×	○	1902	×							○
Revolution	革命	○			○		1902								○
Hypothesis	哲学	○			○	○	1902	×			○	○	○	○	
Ethics	倫理学	○				○	1902								○
Hypnotism	催眠術	○	×	×	×		1904	×	×	×	×	×	×	×	○
Common Sense	常識	○	×	×	×	○	1910	×							○
Logic	論理学		×	×	○	○	1902	×							○
Reform	改革		○	○	○		1904								○

表 2

漢語	言 海	大 言 海	年代 (梁)	辞源 (初版)		辞源 (16 版)		辞源 (17 版)		辞源続編	辞海		国語 辞典	大漢和		漢語大	
				古	近	古	近	古	近		古	近		古	近	古	近
功利学		△	1902		△		△		△	△		△	△				
革命	○	○	1902	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
哲学	○	○	1902		○		○		○			○	○		○		○
倫理学		○	1902		○		○		○			○	○		○		○
催眠術		○	1904		○		○		○			○	○		○		○
常識		○	1910		○		○		○			○	○		○		○
論理学	○	○	1902		○		○		○			○	○		○		○
改革	○	○	1904		△		△		△	△		△	○	○		○	

4.3 『哲学字彙』に採録された語

『哲学字彙』に採録された語は全部で6語である。また、以下のことが分かる。

- ① 「功利学、革命、倫理学、催眠術、常識」5語は、『英華大』以前の何れの華英・英華辞書類にも採録されていない。上記の語は訳語として先に梁により使用され、また彼の努力によって近代中国に定着した可能性が高い。
- ② 「功利学」「催眠術」「常識」については、『和英語林集成』（初版、再版、三版）では英語原文さえも採録していない。『言海』でも採録していない。これは上記の3語が日本に定着するまでにはかなりの時間がかかったことを物語る。即ち、これらの語はまだ日本に定着していないうちに、いち早く梁により使用されたと考えられる。そして、『催眠術』の英語原文“Hypnotism”は『英華大』以前

の何れの華英・英華辞書類にも採録されていない。これは日本借用語を近代中国に移入することにおいて、梁が果たした役割の大きさを明確に示している。

- ③ 「哲学」は『新增 97』から英華辞書類に採録されるようになった。この語は日本借用語に属するものの、梁により使用される前に既に中国に移入された。
- ④ “Revolution (革命)”について、『英華大』以前の華英・英華辞書類では、訳語として採録していない。この語は明治期に日本で造られた可能性が高い。『英華和訳字典』に於いて、中国語訳文には「変、乱、反、叛、叛逆」などの使用に止まることに対して、和訳の部分には既に「カクメイ (革命)」を明記するようになっている。これは、当時日本では既に「革命」を“Revolution”の訳語として使用するようになったことを意味する。この現象はより明確に「革命」が日本製であることを証明している。

梁啓超は自ら「釈革」(1902)という文章の中に、「革命」の意味変遷を考察した。そして、「革命」がもともと「天命が改まり替る義」、つまり、朝代(皇帝)の改まり替ることを「革命」と呼ぶが、現在、「憲法の範囲を超えた行為によって国家の基礎を変革すること。旧い制度を壊して、新しい制度を建てること」を「革命」と呼んでいることを明確に指摘している。『辞源』『辞海』『大漢和』『漢語大』も、下記のように、「革命」を意味の発展のある「新しい語」としている。即ち、「革命」は梁の指摘したように、新たな意味が付与された語に属する。この新たな意味は、“Revolution”の訳語として、明治期に日本で付与された可能性が高い。

革命

従来¹⁶：天命が改まり変り、他の王統が代わって統治者となること。

天地革而四時成。湯武革命。順乎天而応乎人。(易)

発展¹⁷：政治上、或は社会的に起こった大変革。

なお、『漢語大』では、新たな意味の初出として、下記の例文を挙げている。

怎樣叫做革命？革命就是造反。(陶成章、龍華会章程、檄文)

陶成章(1878-1911)は辛亥革命時期の著名な革命派のリーダーである。「龍華会章程・檄文」の最後に甲辰(1904)と記されている¹⁸。梁がこの語を使用したのは1902年である。この語の使用について、単にこの表記から見れば、梁のほうが早かったと思うが、筆者の調査により、『国民報』第二期(1901、6、10)、第三期(1901、7、10)、第四期(1901、8、10)に掲載された「中国滅亡論」には12箇所も「革命」という表記が見える¹⁹。梁が使用する以前、この語が既に近代中国に移入された可能性がある。梁は割注をつけるだけではなく、「釈革」という文章を書いて解釈したのは、恐らく当時「革命」がまだ一般化していなかったからであろう。

- ⑤ 『大漢和』も『漢語大』も「功利学」を採録していない。この語は梁によって使用された後、一時的に近代中国に定着したが、その後、死語に転じたと考えられる。

4.4 『和英語林集成』に採録された語

この類いの語は「改革」「論理学」2語である。

「改革」については、『大漢和』『漢語大』に何れも下記のように古典の出典しか書かれていない。

瓊復上言、覆試之作、將以澄洗清濁覆実虚濫、不宜**改革**。

上記の例文に使用した「改革」は「改めかえる、変更、改易」を表す。しかし、今使用している「改革」は“Reform”の訳語として「目的が国家の基礎に動揺を及ぼさず、方法も暴力的でない変革」を表す。この語は日本で新たな意味が付与された後、梁の努力によって、近代中国に移入された「新しい語」に属する可能性が高い。『辞源』では何れの版にも見出し語として「宗教改革」を採録しているものの、「改革」を取上げていない。『辞海』でも同じ記述である。当時の中国では、「改革」がまだ自立語として一般に認められていないと考えられる。『国語辞典』ではこの新しい意味の語積のみが書かれている。つまり、「改革」を古典中国語とすることに比べると、むしろ「新しい語」として多く使用していると言えるだろう。

『明治のことば辞典』を参考にすると、「論理学」の初出が『附音挿図英和字彙』（1873）であることが分かる。『辞源』では“Logic”を「名学」に訳した。「論理学」も見出し語として取扱っているが、その語積に「詳見名学（詳しくは「名学」を見よ）」のように書かれている。即ち、当時の中国において、「論理学」は姿を現したが、まだ一般に広く使用されていない。『漢語大』では、梁の著作のみを出典としている。これはこの語が梁により使用され、また梁の努力によって近代中国に定着したことを示している。

5 「日本人訳」「東訳」などの特徴的な表現を付けていない語

これらの語については、二つの可能性がある。一つは、当時の中国においてはまだ適当な「訳語」がないため、梁がそのまま日本借用語を使用した。もう一つは、梁が新しい概念や思想を中国人読者に分かりやすく説明するために、当時の中国に姿が現れたばかりの「新語」を「訳語」として取扱った。梁が自ら英語原文をつけて解釈したのは、少なくとも彼自身はこれらの語がまだ近代中国に普及していないか、或いは定着していないと認識したからだろう。即ち、近代中国において、これらの語が新しい語であり、日本借用語に属する可能性が十分考えられる。

この類いの語は①割注、附言、案及びその関連部分にある語、②本行にある語、という二タイプに分けられる。

5.1 割注、附言、案及びその関連部分にある語

5.1.1 語の出現箇所

例：（案）墨子所謂辞、即論理学所謂**命題** Proposition 也。²⁰

梁はこの語がまだ近代中国に普及していないか、或いは定着していないと認識していて、案の形として解釈したのであろう。

5.1.2 辞書類による調査

この類いの語は合せて 10 語である。資料による調査結果を表 3 と表 4 に纏める。

表 3

英語原文	漢語	哲学 字彙	和英語林 集成			明治 のこ とば 辞典	年代 (梁)	華 英 字 典	英 華 字 典	英華 和訳 字典	新増 97	新増 99	華英 音韻 字典 集成	英華 大
			初	再	三									
FreeTrade	自由貿易	○	×	×	×	○	1901	×	×	×	×	×		
Prudence	思慮	○					1902							
Extension	外延	○				○	1904	×						○
Intension	内包	○	×	×	×	○	1904	×	×	×	×	×		○
Term	名辞	○					1904							○
Premise	前提	○				○	1904	×						○
Proposition	命題	○	×		○	○	1904	×						○
Particular-proposition	特称命題	○	×	×	×		1904	×	×	×	×	×	×	×
Politics	政治学		×		○		1902							○
Socialism	社会主義					○	1902	×						○

表 4

漢語	言 海	大言 海	年代 (梁)	辞源 (初版)		辞源 (16 版)		辞源 (17 版)		辞源統編	辞海		国語 辞典	大漢和		漢語大	
				古	近	古	近	古	近		古	近		古	近	古	近
自由貿易			1901		○		○		○	△		○	○				
思慮	○	○	1902	△		△		△					○	○		○	
外延			1904		○		○		○			○	○		○		
内包			1904		○		○		○			○	○		○		○
名辞		○	1904												○		○
前提		○	1904		○		○		○			○	○		○		○
命題		○	1904	○	○	○	○	○	○			○	○		○		○
特称命題			1904									○	○		○		
政治学			1902		○		○		○			○	○				○
社会主義	○		1902		○		○		○			○	○		○		○

5.1.3 『哲学字彙』に採録された語

この類いの語は8語である。表3と表4から次のことが分かる。

- ① 「外延、内包、名辞、前提、命題」は梁の努力により近代中国に定着した可能性が高い。そのうち、「外延」「内包」に注目すべきである。『漢語大』では、「内包」を採録しているのに、同じ論理学用語の「外延」を採録していない。これが何故なのかよく分からないが、何れの版の『辞源』でもこの2語を採録していて、英語原文も付けている。『大漢和』でも『辞海』でも『国語辞典』でもこの2語を採録している。これに対して、『言海』、『大言海』は何れも採録していない。ここから、この2語の初出は日本であるが、辞書類に定着するのはむしろ、中国のほうが早かったと考えられる。
- ② 「名辞、前提」は『英華大』以前の何れの華英・英華辞書類にも採録されていない。即ち、この2語は訳語として梁の努力によって近代中国に定着した可能性が高い。『和英語林集成』（初版、再版、三版）も『言海』もこの2語を採録していない。『大言海』に至って、ようやく英語原文付きの訳語として採録されるようになった。これに対して、梁は既に1904年にこの2語を使用していた。ここから、日本借用語の中国への移入における梁の積極性が見える。
- ③ 「特称命題」については、『和英語林集成』（初版、再版、三版）では英語原文さえも採録していない。『言海』でも採録していない。『大言海』に至ってようやく「特称」という見出し語が現れたが、その語釈について、「特ニ其物ニノミ云称、特有ナル称呼」のように書かれている。これは論理学専門用語“Particular proposition”と意味合いが異なっている。これはこの語が日本に定着するまでにはかなりの時間がかかったことを物語る。即ち、この語はまだ日本に定着していないうちに、いち早く梁により使用されたと考えられる。なお、中国資料においては、何れの華英・英華辞書にもこの語の英語原文を採録していない。つまり、近代中国において、“Particular proposition”は全く斬新な概念を表すものである。何れの版の『辞源』にも「特称命題」「特称」を採録していない。『辞海』、『国語辞典』に至って、採録されるようになったが、『漢語大』には採録されていない。当時の社会においては、この語がまだ一般的訳語として定着していないことを示していると同時に、この語が梁によって近代中国に移入され、一時的に近代中国に定着したが、その後死語に転じた可能性が高い。
- ④ 「命題」については、『漢語大』では古典の出典が書いてあるが、その意味が「題を命ずる」というものである。これに対して、『辞海』、『国語辞典』、『大漢和』では、見出し語として「命題」を取上げているものの、何れも上記の意味の語釈を書いていない。『辞源』では上記の意味の語釈を書いているが、語釈の最後に附するだけの形になっている。語釈の冒頭に、「論理学名詞、謂以言辞表示判断之結果者(後略)」のように書いてあり、論理学用語として詳しく解釈している。「命題」は「新しい語」に属し、近代に至ってこの語は古典語としての意味よりもむしろ、日本借用語としての意味で多く使用されている可能性が高い。

- ⑤ 「自由貿易」は所謂「二重構成の多字語」に属する。恐らくこのために多くの辞書編集者はこれを見出し語から除外したのだろう。しかし、何れの版の『辞源』も『辞海』も『国語辞典』もこの語を採録している。しかも、『辞海』『国語辞典』には英語原文を付している。『辞源統編』は英語原文を付けたまま、「自由貿易主義」を増補している。ここから、この語が新しい訳語としてよく使用されていたと考えられる。
- ⑥ 「思慮」については、『大漢和』と『漢語大』に古典の出典のみが書かれている。しかし、その意味は「慮る、考える、分別」に止まり、論理学用語“Prudence”の意味と違う。『辞源』ではこの語を見出し語として取上げていないが、見出し語「思想」の語釈に「思慮也」のように書いてある。『辞海』ではこの語を採録していない。“Prudence”の訳語とする「思慮」は日本借用語であり、『国語辞典』に採録されたが、その後、他の語に代えられた可能性が高い。

5.1.4 『和英語林集成』に採録された語

この類いの語は「政治学」1語だけである。しかし、『和英語林集成』の初版と再版では何れもこの語を採録していない。他の日本借用語に比べると、この語の造られた時期は遅い。『言海』も『大言海』もこの語を採録していない。この語が日本製でありながら、一般用語として日本に定着するにあたってかなりの時間がかかったと思われる。これに対して、中国では1902年に梁により使用された後、日本より早く辞書類に定着した。

5.1.5 『明治のことば辞典』に採録された語

この類いの語は「社会主義」1語である。中国では、モリソン『華英字典』は「社会主義」の英語原文“Socialism”さえも採録していない。ロブシャイト『英華字典』は“Socialism”を採録しているが、訳語の中に「社会主義」が見えない。『華英大』以前の華英・英華辞書は何れもこの語を採録していない。日本では、「社会主義」を採録した辞書は時代順に挙げると『日本大辞書』(1893)、『新和仏辞典』(1907)、『井上英和大辞典』(1915)、『和独辞典』(1921)、『模範仏和大辞典』(1921)などがある。この語は日本製に属する可能性が高い。ところが、『言海』ではこの語を採録していない。『和仏大辞典』(1904)では「社会」の語釈に「社会主義」のフランス語原文“Socialisme”を挙げているが、「社会主義」が現れない。これに対して、中国では、この語が1902年に梁によって移入された後、『辞源』(初版1915)を始め、それ以降の全ての辞書に定着した。ここから梁を代表とする近代中国人の日本借用語を受入れる速さが窺える。

5.2 本行にある語

5.2.1 語の出現箇所

例：人不得有私財。一国所有。当為一国人之公産。其奴隸及外国人。則使為服役。貨財所出。分少許以給之。此実後世**共產主義** Communism之権輿也²¹。

この語については、二つの可能性がある。一つは、近代中国においてはまだ適当な「訳語」がないため、梁がそのまま日本借用語を使用した。もう一つは、梁が新しい概念や思想を中国読者に分かりやすく説明するために当時中国に使用されている語を「訳語」として取り扱った。近代中国においては、この語が「新しい語」であり、日本借用語に属する可能性が十分考えられる。

5.2.2 辞書類による調査

この類いの語は合せて6語である。資料による調査結果を表5と表6に纏める。

なお、“Law of nature”の訳語については、梁は「性法派」を取上げたが、『哲学字彙』は「性法」に訳した。『明治のことは辞典』を参考にすると、「性法」の初出が『附音挿図英和字彙』(1873)であることが分かる。「性法派」―「性法」、この現象については、この語が定着するに至るまでのゆれとも考えられる。本稿では考察対象語として「性法」を採用することとする。

表 5

英語原文	漢語	哲学 字彙	和英語林 集成			明治の ことは 辞典	年代 (梁)	華 英 字 典	英 華 字 典	英華 和訳 字典	新増 97	新増 99	華英 音韻 字典 集成	英華 大
			初	再	三									
Law	法律	○		○	○		1902	○						○
Law of nature	性法	○				○	1902	×	△	×	×	×	×	×
Religious	宗教	○					1904							○
Standard	本位	○					1904							○
Communism	共產主義					○	1902	×						○
Technique	技術					○	1902	×	×	×	×	×	×	○

表 6

漢語	言 海	大 言 海	年代 (梁)	辞源 (初版)		辞源 (16版)		辞源 (17版)		辞源統編	辞海		国語 辞典	大漢和		漢語大	
				古	近	古	近	古	近		古	近		古	近	古	近
法律	○	○	1902	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
性法			1902		○		○		○								
宗教	○	○	1904		○		○		○			○	○		○		○
本位		○	1904		△		△		△			△	○	○	○	○	○
共產主義		○	1902		○		○		○			○	○		○		○
技術	○	○	1902	○		○		○		△	○		○	○	○	○	○

5.2.3 『哲学字彙』に採録された語

この類いの語は全部で4語である。「法律」については、『辞源』『辞海』では「主に刑法と律令」と、古典中国語としての語釈が書かれている一方、「国家政權機関により制定された法令、法規、条令及び規定」という新たな意味の語釈も書かれている。これに対して、『国語辞典』では新たな意味の語釈のみが書かれている。“Law”の訳語とする「法律」はモリソン『華英字典』（英華の部、1822）に採録されている。しかも、同字典の音節検索する華英の部である「五車韻府」（1819）が既に「法律」を見出し語としている。『和英語林集成』初版では“Law”の訳語の中に「法律」を取上げていない。この語は新たな意味が付与された「新しい語」に属するが、日本製ではない。なお、何れのロブシャイト英華字典にも「法律」を“Law”の訳語として採録していない。この語は中国製でありながら、先に日本に定着した後、梁によって使用され、近代中国に再認識させた可能性が高い。

「本位」については、『大漢和』と『漢語大』に何れも①「元の官位」②「元の席」③「本人の府第」という古典の出典を書いたうえに、意味変遷のあることを示している。『辞源』と『辞海』では「本位」を採録していないものの、それぞれ「本位貨幣、金本位、銀本位、単本位」「金本位、単本位」という見出し語を採録している。『国語辞典』ではこれらの語を全て採録しているが、古典中国語としての意味合いを失っている。ここから、近代中国において、「本位」は専ら“Standard”の訳語として使用されるようになったことが窺える。

“Law of nature”について、モリソン『華英字典』では採録していないが、ロブシャイト『英華字典』では「性之法」に翻訳した。その後の英華辞書類はこの語を採録していない。『辞源』では「性法」を見出し語としているが、他の中国補助資料では「性法」も「性法派」も取上げていない。この語の使用は梁本人及びほんの一部の人に止まり、近代中国に定着していない可能性が高い。

5.2.4 『明治ことば辞典』に採録された語

この類いの語は「共產主義」「技術」2語である。

日本では「共產主義」を採録した辞書に『新編漢語辞林』（1904）、『井上英和大辞典』（1915）、『和独辞典』（1921）、『模範仏和大辞典』（1921）が挙げられる。中国では、『英華大』までには、何れの華英・英華辞書にもこの語を採録していない。即ち、この語は明治期に日本で造られた可能性が高い。ところが、『和仏大辞典』（1904）は「共產」の語釈には「共產主義」のフランス語原文“Communisme”を挙げているが、「共產主義」を見出し語としていない。『新和仏辞典』（1907）も『註解和独辞典』（1933）も緊密な関連性がある「社会主義」を採録しているものの、「共產主義」を採録していない。これに対して、梁がこの語を使用したのは1902年である。しかも、『辞源』（初版1915）からの全ての中国辞書はこの語を採録するようになった。この語はまだ一般的な社会用語として日本に定着していないうちに、梁により使用され、またこれをきっかけにして近代中国に定着した可能性がある。

「技術」については、『大漢和』と『漢語大』に何れも①「てわざ、芸術」②「男子を翻弄する手練」という古典の出典が書かれている。“Technique”の訳語として現れるのは『英華大』からである。これに対して、『明治のことは辞典』の記述により、“Technique”の訳語とする「技術」の初出は『五国対照兵語辞書』（1881）であることが分かる。中国では『辞源』の何れの版にも『漢書』の例文を引用していて、「専門之芸事也」と、解釈している。『辞海』に至ってもまだ古典の出典のみが書かれているので、この語が近代中国に定着するまでにはかなりの時間がかかったと考えられる。

6 おわりに

本稿は概観的な視点から梁と日本借用語との関係、特に日本借用語の中国への移入において、梁が果たした役割について考察してみた。その結果を表7に示す。

表7

日本借用語 (23 語)										中国製漢語 (1 語)
梁によって近代中国に移入された語 (22 語)								梁の使用前の定着語 (1 語)		
定着語 (18 語)				一時的定着語 (4 語)						
技術	常識	外延	催眠術	社会主義	改革	思慮	性法	哲学	法律	
宗教	内包	名辞	論理学	共産主義	革命	功利学				
前提	命題	本位	倫理学	自由貿易	政治学	特称命題				

表7に示したように、考察対象語24語のうち、23語は日本借用語に属する可能性が高い。他の1語（法律）は中国製でありながら、先に日本の辞書類に採録され、また梁の使用によって近代中国に再認識させたものである。日本借用語の23語のうち、22語は梁の努力によって近代中国に移入されたものである。これらは梁の使用以前に既に定着していた1語（哲学）に比べると圧倒的に多い。梁によって中国に移入された22語のうち、元は古典中国語でありながら日本で新たな意味が付与された語は6語（技術、改革、革命、命題、本位、思慮）である。しかも、「思慮」を除いて、他の5語はそれ以後古典の意味よりむしろ付与された、新たな意味でよく使用されている。そして、22語のうち、一時的に中国の辞書類に採録されたものの、その後死語に転じた語は4語（思慮、性法、功利学、特称命題）である。まだ日本辞書類に定着していないうちに、梁によって移入され、中国辞書に採録された語は1語（自由貿易）である。ここから、日本借用語の中国への移入において、梁が果たした役割の重要性と大きさが窺える。

注

- 1 『人民日報（海外版）』（2001年10月15日）第5版。原文は中国語であるが、本稿では引用文の翻訳は全て筆者の翻訳したものである。

- 2 梁啓超：字は卓如、号は任公。清朝末期、民国初期の著名な政治家、ブルジョアジーの改良主義の思想家である。梁は日本で 14 年間の亡命生活を送っていた。その間に梁は『清議報』や『新民叢報』や『新小説』などを創刊して、これらの新聞や雑誌を通じて研究成果や新しい思想や文化を近代中国に伝え、当時の社会に極めて大きな影響を与えたと言われている。梁に対する研究は中国では言うまでもなく、日本でも盛んである。京都大学人文科学研究所の共同研究はその中の一つである。代表者の狭間氏（1999）は「前世紀から今世紀初にかけて、かれ（梁）が伝統中国の近代中国への文明的転換において果たした役割は、他に比べようのないほど大きなものだった。二十一世紀を目前にひかえて（中略）梁啓超の歴史的な役割はもっと注目されてよいと思われる。」と述べ、梁を高く評価し、梁に対する研究の必要性を強調した。
- 3 梁啓超が日本に亡命した後、最初に創刊したものである。十日間に一期ずつを発売する。毎期が 40 ページであり、3000 冊以上を発行し、頗る高評を得た。
- 4 林志鈞編、1936 年版影印。『清議報』『新民叢報』に掲載した文章のほとんどに加えて、未発表の文章も多く収録している。
- 5 沈国威『近代日中語彙交流史』p 49。
- 6 陳力衛『和製漢語の形成とその展開』p 358。
- 7 ロブシャイト英華字典（1866－1869）が近代訳語の形成に与えた影響については、森岡健二（1969）が定説化した。飛田良文・宮田和子（1997）により、日本国内に現存するロブシャイトの英華は約 80 点も存在している（モリソン辞書は 15 点、ウィリアムズは 5 点、メドハーストは 19 点）という。この驚くべき数字を通じて、近代訳語の形成におけるロブシャイト英華字典の影響の大きさが窺える。荒川清秀（2000）はロブシャイトがそれまでの中国洋学（西学）の訳語の成果を集大成したと認める一方、近年相次いで出版された版復刻や辞典集成にある問題点を指摘した。
- 8 『明治のことば辞典』は二次資料なので、考察対象語については引用原典で確認した。
- 9 『言海』『大言海』は「近代語」の認定によく利用される辞書である。しかも、多くの考察対象語は見出し語として『言海』に採録されていないが、『大言海』に採録されている。日本における日本語借用語の定着の実態を都合よく反映しているので補助資料に加えた。
- 10 出現箇所の違いが特に意味を持っているか否かについては考察すべきであるが、本研究は指摘する段階に止まり、今後の研究に託す。
- 11 引用文の旧字体や異体字等は、現行の字体に直したが、ゴシック体及び傍線は筆者が付したものである。
- 12 『飲水室合集・文集之十三』p 30、「楽利主義泰蘭邊沁之学説」（緒論及小伝）、1902。なお、梁が“Utilitarianism”の訳語として、他に「利用派」「快樂派」を取上げている。しかし、この 2 語の使用はこの文に限られ、再びその姿が現れていなかった。

たので考察対象語から除外することとする。また、印刷の都合を考え、割注二行書きを小字一行書きに改めて示す。

- 13 『飲氷室合集・專集之三十七』p 55、「附墨子之論理学」、1904。
- 14 『飲氷室合集・文集之九』p 40、「釈革」、1902。なお、梁が「革新」も訳語として取上げたが、何れの日本対照資料も採録していないため、考察対象語から除外した。
- 15 対照一覧表を作成する際、以下の記号を使用することとする。
 - 「○」：考察対象語が辞書類に採録されている。
 - 「(空白)」：考察対象語が辞書類に採録されていない。
 - 「△」：考察対象語はそのまま採録されていないが、緊密な関連性のある語が採録されている。例えば、『辞海』では、考察対象語の「本位」を採録していないものの、「金本位」「單本位」を採録している。
 - 「×」：考察対象語だけではなくその英語原文も辞書類に採録されていない。
- 16 「従来」と「発展」に記した内容は全て辞書類から引用した語釈である。「従来」とは、中国古典の出典が載せられている語釈を指す。なお、中国辞書類の語釈の翻訳は全て筆者がしたものである。
- 17 「発展」とは、古典の出典が載せられていない、或は出典が載せられていない語釈を指す。
- 18 『原典中国近代思想史』（第三冊）p 76。
- 19 『辛亥革命前十年間時論選集』pp78-89、内訳：p 80 に 1 箇所、p 84 に 4 箇所、p 85 に 2 箇所、p 86 に 2 箇所、p 87 に 1 箇所、p 88 に 2 箇所。
- 20 『飲氷室合集・專集之三十七』p 56、「附墨子論理学」、1904。
- 21 『飲氷室合集・文集之十二』p 8、「生計学沿革小史」第二章、1902。

参考文献（刊行順）

- 彭文祖（1915）『盲人瞎馬之新名詞』東京・秀光社
実藤恵秀（1943）『明治日支文化交渉』東京光風館
王立達（1958）「現代漢語中从日語借来的詞彙」『中国語文』2月号
張梅、王忍之編（1962）『辛亥革命前十年間時論選集』（上冊、下冊（1963））香港・生活・讀書・新知三聯書店
森岡健二（1969）『近代語の成立 明治期語彙編』（改定版 1991）明治書院
西順蔵（1977）『原典中国近代思想史』（第三冊）岩波書店
沈国威（1993）「現代中国語における日本製漢語」『日本語学』7月号
大原信一（1994）『近代中国のことばと文字』東方書店
沈国威（1994）『近代日中語彙交流史』（新漢語の生成と受容）笠間書院
陳力衛（1994）「從英華辭典看漢語中的日語借詞」『原学』第3輯

- 朱京偉 (1995) 『『明治のことば辞典』と現代中国における日本語からの借用語』『明海日本語』第 1 号
- 荒川清秀 (1997) 「近代日中語彙交流とロブシャイトの英華辞典」『中国図書』3 月号
- 何華珍 (1997) 「日語言対比的訓詁学研究」『古漢語研究』No.38
- 飛田良文・宮田和子 (1997) 「19 世紀の英華・華英辞典目録」『国語論究 6 近代語の研究』明治書院
- 那須雅之 (1997) 「Lobscheid の《英華字典》について (1)」愛知大学『文学論叢』第 114 輯
- 荒川清秀 (1998) 「ロブシャイト英華字典の訳語の来源をめぐって (地理学用語を中心に)」『文明 21』創刊号、愛知大学国際コミュニケーション学会
- 荒川清秀 (1999) 「日本漢語の中国語への流入」『日本語学』5 月号
- 宮田和子 (1999) 「井上哲次郎『訂増英華字典』の典拠増補訳語を中心に」『英学史研究』第 32 号
- 狭間直樹編 (1999) 『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本：共同研究』みすず書房
- 荒川清秀 (2000) 「近代語研究における英華・華英辞典」『辞游 file』5 月号
- 陳力衛 (2001) 『和製漢語の形成とその展開』汲古書院

辞書類 (刊行順)

ROBERT MORRISON 『A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE PART III』1822 年原本発行、ゆまに書房『華英辞書集成 1 - 6 巻』、1996/へボン著『和英語林集成』(英和の部、飛田良文・李漢燮編集、1867 初版・1872 再版・1886 三版対照総索引) 港の人、2001/REV. W. LOBSCHIED 『英華字典』(LOBSCHIED'S ENGLISH & CHINESE DICTIONARY) 1866 - 1869 年版復刻、東京美華書院、1996/柴田昌吉、子安峻『附音挿図英和字彙』(新版) 横浜・日就社、1873/大空社『近代英華・華英辞書集成』(1998 - 1999) ① LOBSCHIED 原著中村敬字校正『英華和訳字典』1879 年版復刻 (A DICTIONARY OF THE ENGLISH, CHINESE AND JAPANESE LANGUAGES, WITH THE JAPANESE PRONUNCIATION VOL. I, VOL. II)/ LOBSCHIED 原著 F. KINGSELL 増訂『新增英華字典』(A DICTIONARY OF THE ENGLISH AND CHINESE LANGUAGE, WITH THE MERCHANT AND MANDARIN PRONUNCIATION) ② 1897 年版復刻 ③ 1899 年版復刻/④ LOBSCHIED 原著企英訳書増訂『華英音韻字典集成』1903 年版復刻 (AN ENGLISH AND CHINESE PRONOUNCING DICTIONARY)/大槻文彦『言海』(1890 年版復刻) 大修館、1979/飛田良文編『哲学字彙訳語総索引』(『哲学字彙』1881 年版復刻) 笠間索引叢刊 72 笠間書院、1979/山田美妙『日本大辞書』(1893 年版複製) 東京・名著普及会、1979/J. M. LEMARECHAL 『和仏大辞典』(DICTIONNAIRE JAPONAIS-FRANCAIS) 三才社、1904/山田武太郎『新編漢語辞林』1904 年版影印版、大空社、1996/松井知時、上田駿一郎『新和仏辞典』(NOUVEAU DICTIONNAIRE

JAPONAIS-FRANCAIS) 大倉書店、1907/井上十吉『井上英和大辞典』(INOUE'S ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY) 井上刊行会、1915/方毅等『辞源』(1915年初版影印版、北京・商務印書館、1999/方毅等『辞源』(16版1920、17版1922) 上海・商務印書館/澤井要一、辻善定『和独辞典』(JAPANNISCH-DEUTSCHES WORTERBUCH) 南山堂、1921/柳川勝二等『模範仏和大辞典』(NOUVEAU DICTIONNAIRE JAPONAIS-FRANCAIS) 白水社、1921/顔惠慶『英華大辞典』(小字本、ENGLISH AND CHINESE STANDARD DICTIONARY SMALL TYPE EDITION) 北京・商務印書館、1921/方毅等『辞源統編』(初版) 上海・商務印書館、1931/E. WORTERBUCH&R. ODAGIRI『註解和独辞典』(NEUES JAPANNISCH-DEUTSCHES WORTERBUCH) 富山房、1933/中国大辞典編纂処『辞海』上海・商務印書館、1936/大槻文彦『大言海』富山房、1937/中国大辞典編纂処『国語辞典』中華書局、1937/諸橋轍次『大漢和辞典』大修館、1956/惣郷正明・飛田良文『明治のことば辞典』東京堂、1986/羅竹風主編『漢語大詞典』漢語大辞典出版社、1986-1994

本稿は国語学会 2002 年度春季大会 (2002 年 5 月 19 日、東京都立大学) における口頭発表の内容をもとに、加筆・修正を施したものです。会場内外で多くの先生方から御指導、御意見、御助言をいただきました。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

(1) ウンバク・天津外国語学院助教授)